

高校生の登校を規定する要因と中途退学者への評価意識

—中学生との比較—

本 間 友 巳

(京都教育大学)

Factors Contributing to School Attendance of Senior High School Students and Evaluating Perception
toward Dropouts : Comparison with Junior High School Students

Tomomi HONMA

2002年11月30日受理

抄録：中途退学者が年間30人を越える公立高校生徒を対象に、登校回避願望、欠席促進理由、登校理由を調査し、すでに実施した中学生の結果と比較した。その結果、登校回避願望は高校生が有意に高く、欠席促進理由、登校理由の因子構造にも違いが見られた。特に登校理由の中で、中学生の『自己基準』が、高校生では『学業・生活規範』と『卒業・進路』に分かれ、その中の『卒業・進路』がもっとも強い登校理由であった。しかし、欠席願望に及ぼす影響に関しては高校生と中学生に差は認められなかった。また、中途退学者への評価意識では『消極的評価』がもっとも強く、高校生では中途退学者への関心はあまり高くない傾向が明らかとなった。

キーワード：欠席促進理由、登校理由、中途退学者への評価意識、高校生

I 問題と目的

不登校児童生徒数の増加（内閣府、2002）が続く中で、筆者はこれまでに、学校に通っている一般の中学生を対象に登校に関連する意識（欠席促進理由、登校理由）や不登校生徒への評価意識を明らかにし、それらをもとに欠席願望や欠席を抑制する要因を見いだしてきた（本間、2000）。その結果、不登校願望を抑制する要因として、登校理由の中の「学校魅力」が相対的に大きな影響を与えていること、また同じく登校理由の中の「自己基準」も有意な影響を示していることを明らかにしてきた。

この研究の意図は、「なぜ子どもたちが学校に行かないのか」を考えると同時に、「なぜ彼らは学校に行っているのか」、すなわち登校理由を明確にすることが、増加する不登校児童生徒を理解し援助する上でより大きな意義を持つと考えたことにある。すなわち、不登校のきっかけとなる学校ストレスなどのマイナスの要因を見つけだしそれらの除去や改善に取り組むことに加えて、学校と子どもたちとの接点やつながりという積極的な要因を見いだしていくことが、不登校の予防や援助に新たな見方や方法を提供する可能性を考えたとある。換言すれば、子どもたちと学校との接点や絆が、欠席願望をはじめとする登校回避願望を抑制して登校を可能にさせているのである。もし、そのような学校との接点や絆が小さければ、わずかなストレスで子どもたちは不登校になってしまうであろう。逆に、学校ストレスが大きくても、学校との接点や絆が大きければ、登校は維持される可能性が高い。このように考えるとき、登校を支える諸要因を見だし、その中で何が欠席願望を抑制しているかを明らかにすることは、不登校の予防や援助に大きな意義を与えるものと言える。

以上のような認識は、不登校数がもっとも多い中学生のみならず、小学生や高校生でも同様と考えられる。そこで本研究では高校生を対象とした。その理由は、高校生を対象とした全国規模の不登校数に関する調査は存在しないものの、高校生の中途退学者が年間約10万人を越えている状況（文部省、2001）から推測して、不登校生徒がかなり存在すると考えられるからである。

そこで、本研究の第1の目的は、学校に通っている一般の高校生を対象に登校に関連する意識（欠席促進理由や登校理由）を見つけだし、それらの結果をすでに実施した中学生の結果と比較しながら、高校生の登校に関する意識や欠席願望を抑制する要因を明らかにすることである。さらに、義務教育でない高校生の場合、欠席のみ

ならず、中途退学に関する意識を明らかにすることも肝要と考えられる。そこで、中途退学願望の程度や中途退学者への評価意識を見つけだし、登校意識の影響を明らかにすることを第2の目的とする。

尚、高校の調査の場合、高校のタイプによって実態が大きく異なっている。本研究での調査対象は、他の高校に比べて入学が比較的容易で、年間の中途退学者数が30人を越える中途退学者の多い全日制公立普通科高校生徒とした。その理由は、一般にこれらの高校に所属する生徒が他のタイプの高校生に比べて大きな困難を抱えており、早急に実態を明らかにすべきと考えられるからである。

II 方法

1. 調査対象

年間の中途退学者数が30人を越える公立高校2校に在籍する1～3年生、計415名（男子193名、女子222名）で実施した。

2. 調査内容

中学生の登校意識や不登校生徒への評価意識に関する調査（本間, 2000）をもとに、高校生を対象にした自由記述（99名）による調査を行った上で新たな項目を加えて、「欠席を促進する理由（登校理由）（19項目）」、「実際に学校に行っている理由（登校理由）（20項目）」、「中途退学者への評価意識（16項目）」を作成し、それぞれに対する回答を求めた。また、登校回避願望として欠席願望・早退願望・遅刻願望の3項目、中途退学願望（1項目）を作成した。いずれも“ぜんぜん思わない（1点）”から“強く思う（4点）”までの4件法で測定した。さらに、4月からの実際の欠席日数を“0日～4日以内（1点）”“5日～10日以内（2点）”“11日～20日以内（3点）”“21日～30日以内（4点）”“31日以上（5点）”の5件法で測定した。

3. 調査手続き

1999年12月～2000年1月、無記名の質問紙法による学級単位の一斉調査を行った。実施は学級担任に依頼した。なお、比較のための中学生の調査（本間, 2000）は、1998年12月に公立中学校3校419名で実施したものを使用した。

III 結果と考察

1. 登校回避願望、欠席日数について

登校回避願望（欠席願望、早退願望、遅刻願望）のそれぞれの項目で評定の平均値を求め、中学生で行った結果と比較したところ、FIGURE 1のようにすべての項目で高校生が有意に高かった（欠席願望（ $t(815) = 6.645, p < .001$ ）；早退願望（ $t(831) = 5.357, p < .001$ ）；遅刻願望（ $t(831) = 6.655, p < .001$ ））。欠席日数に関しても、メジアン検定の結果（FIGURE 2）、高校生の方が有意に高いことが明らかとなった（ $\chi^2(1) = 15.719, p < .001$ ）。高校の校則が中学に比べてかなり緩い点などを考えると、これらの結果は、調査対象の高校生の学校ストレス自体の高さから生じたというよりも、彼らの学校離れ傾向が中学生よりも強いことによると推測できる。

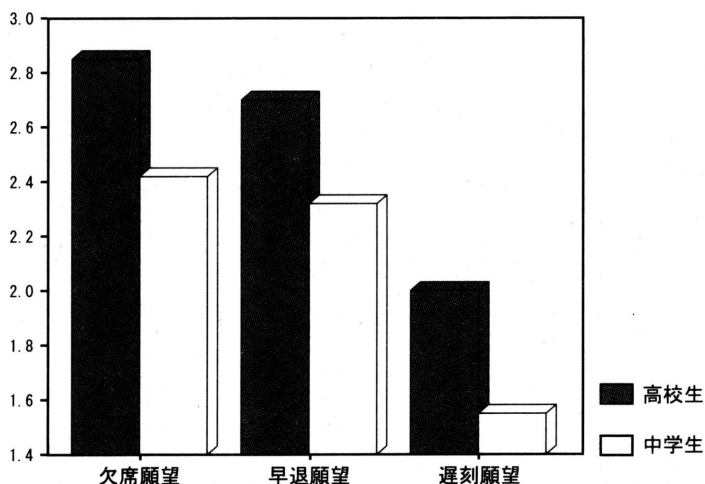


FIGURE 1 登校回避願望の中学生との比較（平均値）

2. 欠席促進理由について

因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った結果，固有値1以上の基準で3因子が抽出された（TABLE 1）。第1因子は“⑪ねむたい”“⑭なんとなく行きたくない”“④遊びたい”などからなり『身体・学校外誘因』と命名した。第2因子は“⑨勉強がわからない”“①テストがある”“②きらいな授業がある”などからなり『学習問題』と名付けた。第3因子は“⑩いじめる子がいる”“⑧友だちとけんかした”“⑤先生に強く叱られた”などからなり『対人問題』と命名した。中学生の場合，高校生の第1因子『身体・学校外誘因』が『身体・気分』と『学校外誘因』二つの因子に分かれており，全体で4因子抽出されていた。中学生で分化していた意識が融合しており，高校生の欠席に関する関心や意識が中学生に比べて低下しているのかもしれない。なお，各因子の α 係数は，.787～.898で比較的高い内的一貫性が認められた。

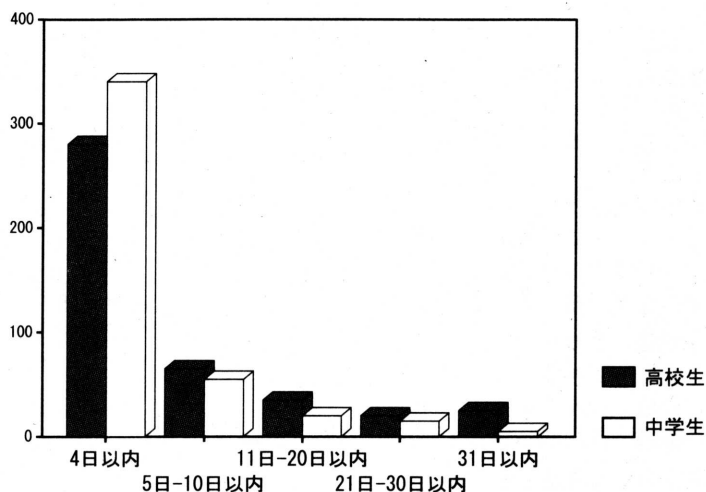


FIGURE 2 欠席日数の中学生との比較（人数）

3. 登校理由について

2と同様の因子分析を実施し，さらに負荷量の小さい1項目を除いて再度因子分析を行った結果，5因子抽出された（TABLE 2）。第1因子は“⑮授業がわからなくなるから”“⑮みんなと差がつくから”“③勉強が遅れるから”“④行かないのは悪いことだから”などからなり『学業・生活規範』，第2因子は“⑥卒業するため”“⑦将来のため”“⑩進学や就職のため”などから『卒業・進路』，第3因子は“⑤学校が楽しいから”“①友だちと会えるから”などから『学校魅力』，第4因子は“⑮他にやることがないから”“⑭なんとなく”などから『習慣』，第5因子は“②親に怒られるから”“⑨親が行けというから”から『親圧力』と命名した。中

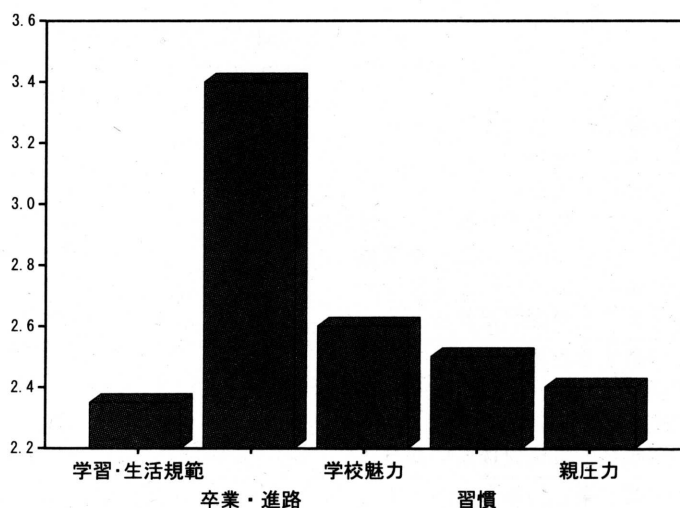


FIGURE 3 登校理由の比較（平均値）

学生の場合，『学業・生活規範』と『卒業・進路』が分離せず，『自己基準』と名付けたひとつの因子として抽出され，全体が4因子で構成されていた。中学生と異なり留年や退学が現実的な問題で，かつ卒業後の進路が進学と就職に分かれる高校生では，『卒業・進路』が独立した因子として重要な意味を持つのであろう。事実，因子負荷量の大きい項目の平均値を尺度得点として登校理由の相対的な強さを比較したところ，FIGURE 3のように『卒業・進路』が有意に高く（『卒業・進路』と『学校魅力』の比較（ $t(408)=18.830, p<.001$ ）），登校理由に関して，卒業や将来の進路のために登校しているという高校生の中心的な意識が明らかになった。なお，各因子の α 係数は，.598～.854で一応の内的一貫性が認められた。

TABLE 1 欠席促進理由に関する因子分析（バリマックス回転後）

		F1	F2	F3	共通性
⑪ねむたい		.781	.204	.019	.652
⑭なんとなく行きたくない		.733	.226	.127	.605
④遊びたい		.717	.321	.054	.621
⑯疲れている		.696	.185	.171	.547
⑮出かけたいたい所がある		.668	.200	.178	.517
⑬朝寝坊した		.621	.131	.169	.431
⑰とても天気が悪い		.603	.230	.114	.517
③少し頭や腹が痛い		.567	.163	.308	.443
⑱友達が一緒に休もうといっている	$\alpha = .898$	.566	.109	.282	.430
⑨勉強がわからない		.142	.666	.219	.512
①テストがある		.219	.643	.109	.473
②きらいな授業がある		.426	.631	.117	.593
⑦宿題や提出物ができていない		.181	.526	.323	.414
⑫きらいな先生と会う	$\alpha = .796$	.366	.419	.281	.389
⑧友だちとけんかした		.238	.237	.728	.642
⑩いじめる子がいる		.119	.133	.710	.536
⑤先生に強く叱られた	$\alpha = .787$	.185	.434	.608	.592
2乗和		4.505	2.349	1.958	
寄与率 (%)		26.499	13.817	11.515	51.830

TABLE 2 登校理由に関する因子分析（バリマックス回転後）

		F1	F2	F3	F4	F5	共通性
⑱授業がわからなくなるから		.862	.147	-.042	.113	-.059	.782
⑲みんなと差がつくから		.803	.126	.001	.194	.034	.700
③勉強が遅れるから		.798	.127	-.060	.065	.108	.672
⑯自分で何事もできる力をつけるため		.671	.146	.326	.039	-.107	.590
④行かないのは悪いことだから		.654	.161	.097	-.002	.143	.483
⑬勉強したいから		.611	-.032	.297	-.035	-.167	.492
⑫行くことが当然だから	$\alpha = .854$	.604	.275	.144	.146	.113	.495
⑥卒業するため		.100	.827	.036	.089	.141	.723
⑦将来のため		.271	.802	.136	.071	.028	.741
⑩進学や就職のため		.259	.781	.101	.046	.022	.689
⑳高校卒の資格がほしいから	$\alpha = .845$	.076	.779	.017	.130	.048	.632
⑤学校が楽しいから		.218	.061	.787	.052	-.099	.683
①友だちと会えるから		.042	.143	.724	.123	.068	.566
⑪好きな人があるから	$\alpha = .598$	.041	.018	.550	-.037	.080	.312
⑮他にやることがないから		.126	.078	.084	.863	.124	.790
⑭なんとなく		.055	.219	-.197	.678	.120	.564
⑧家にいてもつまらない	$\alpha = .652$	.167	.026	.360	.661	.062	.598
②親に怒られるから		.093	.100	.072	.062	.904	.846
⑨親が行けというから	$\alpha = .817$	-.032	.097	.013	.223	.876	.828
2乗和		3.903	2.819	1.886	1.825	1.753	
寄与率 (%)		20.541	14.838	9.929	9.606	9.225	64.140

4. 欠席願望の抑制要因

欠席願望を基準変数、欠席促進理由3因子・登校理由5因子を説明変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行い、中学生の結果と比較した（TABLE 3）。標準偏回帰係数の相対的な大きさから、高校生では『学校魅力』が欠席願望の抑制に大きな影響を与えていた。また『学業・生活規範』と『卒業・進路』も抑制的な影響を及ぼしていた。上述したように『学業・生活規範』と『卒業・進路』は中学生の『自己基準』に対応しており、高校生での欠席願望の抑制要因は、中学生とほぼ同様の傾向を示していることが明らかとなった。中高生ともに、『学校魅力』がもっとも大きな欠席願望抑制要因となっていることから、学校が生徒にとって魅力ある場になることが、中高生の不登校の予防に大きな意義を持つと結論づけることができよう。

また、登校理由の中の『親圧力』が中学生では、欠席願望への促進的な影響を与えていたが、高校生では影響を与えていなかった。このことは、年齢が上がるにつれて、保護者の登校圧力が生徒の欠席願望に影響を与えなくなっていくことを示している。すなわち、高校生になると保護者の登校を巡る影響力が低下していくと考えられる。

5. 中途退学願望と中途退学者への評価意識

高校生自身の中退願望を尋ねたところ、平均値（標準偏差）は1.96（.95）で全体にそれほど高くなかった。中退願望と欠席願望の相関を見たところ、.52とある程度高い相関が認められた。これらの結果から、高校生の中退願望はそれほど高くないものの、中退願望と欠席願望は関連を持っており、欠席願望の延長上に中退願望があると考えられる。

次に、中途退学者への評価意識の因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、解釈可能な4因子が抽出された（TABLE 4）。第1因子は“⑫心配”“⑬理由を知りたい”などから『積極的関心』、第2因子は“⑦本人の自由”“⑪好きにさせればよい”などから『消極的関心』、第3因子は“⑭後悔するだろう”“①よくない”などから『批判』、第4因子は“②うらやましい”“⑨自分も辞めたい”からなり『羨望』と命名した。因子負荷量の大きい項目得点の平均値を尺度得点として比較したところ、FIGURE 4からわかるように『消極的関心』が他の因子に比べて有意に高かった（『消極的関心』と『批判』（ $t(402)=12.557, p<.001$ ））。このことから、高校生は中途退学者に対してあまり積極的な関心を抱いていない傾向が明らかとなった。なお、各因子の α は、.710～.764で一応の内的一貫性が認められた。

6. 中途退学者への評価意識に影響を及ぼす要因

中途退学者への評価意識4因子それぞれを基準変数、欠席促進理由3因子・登校理由5因子・生徒自身の中退学願望を説明変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（TABLE 5）。『積極的関心』と『批判』の2つの基準変数は中途退学者に向けられる感情や価値観の方向性に違いがあるものの、中途退学者への比較的はつきりした評価意識を示している。この2基準変数に、登校理由の『学業・生活規範』や『学校魅力』が影響を与えていることから、登校に対して積極的な意識や価値を持つ生徒ほど、中途退学者に対しても明確な評価をする傾向にあることがわかる。また、『羨望』に対しても説明変数はかなり大きな説明率を有しているが、『積極的関心』や『批判』のような基準変数と異なり、『身体・学校外誘因』や『親圧力』のような比較的受動的な因子が有意な影響を持っていた。とりわけ、他の基準変数には影響が認められない生徒自身の中退学願望が、『羨望』に対してもっとも大きな影響を与えていた。『消極的関心』への説明変数の説明率は他に比べて小さく、登校を巡る意識や中途退学願望は、『消極的関心』という評価意識にはあまり影響を与えていないことが明らかとなった。

TABLE 3 欠席願望に影響を及ぼす要因（重回帰分析）

高校生		中学生	
身体・学校外誘因	.532***	身体気分	.387***
学校不満	.251***	学校不満	.202***
学校不安		学校不安	.147***
		学校外誘因	
学習・生活規範	— .122***	自己基準	— .12*
卒業・進路	— .078*		
学校魅力	— .243***	学校魅力	— .221***
習慣		習慣	
親圧力		親圧力	.139**
R	.717		.671
adj.R ²	.508		.442

*** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$

TABLE 4 中退者への評価意識（バリマックス回転後）

		F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
⑫心配		.677	— .088	.145	.118	.501
⑬理由を知りたい		.644	.015	.238	— .023	.472
⑧なぜ辞めたか不思議		.630	— .007	.296	— .037	.486
⑩勇気がある		.480	.106	.127	.376	.399
④かわいそう		.472	— .234	.226	.149	.351
⑥目標がある	$\alpha = .741$	.400	.164	— .084	.170	.223
⑦本人の自由		— .017	.835	— .015	— .006	.698
⑪好きにさせればよい		— .090	.717	.064	.070	.531
⑯自分で決めたならよい	$\alpha = .764$	.082	.611	— .028	.101	.391
⑭後悔するだろう		.072	.081	.872	.023	.773
⑮もったいない		.329	.030	.674	.023	.564
①よくない	$\alpha = .745$	.332	— .120	.490	— .070	.369
②うらやましい		.122	.036	— .038	.781	.627
⑨自分も辞めたい	$\alpha = .710$	.063	.085	.003	.684	.480
2乗和		2.140	1.716	1.701	1.307	
寄与率 (%)		15.285	12.254	12.152	9.334	49.025

TABLE 5 中退者への評価意識に影響を及ぼす要因（重回帰分析）

	積極的関心	消極的関心	批判	羨望
身体・学校外誘因		.101*	.133*	.162**
学習問題	.116*			.122**
対人問題	.173***			
学習・生活規範	.253***		.294***	
卒業・進路			.161***	
学校魅力	.201***		.149***	
習慣		.131**		
親圧力	.098*		.115*	.119**
中途退学願望				.495***
R	.461	.172	.474	.696
adj.R ²	.202	.025	.215	.479

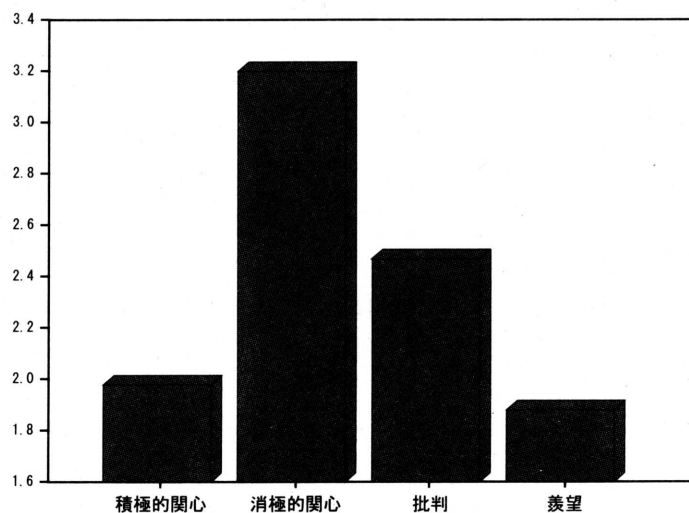
*** $P < .001$, ** $P < .01$, * $P < .05$ 

FIGURE 4 中途退学者への評価意識の比較（平均値）

IV 総合的考察

本研究では、年間の中途退学者数が30人を越える中途退学者の多い公立高校生を対象に、登校に関する意識や中退者へ評価意識に関する調査を実施し、すでに調査を行った公立中学校生徒の結果との比較を試みた。

欠席促進理由の中で、中学生で独立した因子であった『身体・気分』と『学校外誘因』が、高校生では混ざり合ってひとつの因子を構成していた。このことは、高校生の欠席促進理由が、中学生に比べ曖昧になっていると考えられる。さらに中学生に比べて、登校回避願望（欠席願望・早退願望・遅刻願望）、欠席日数のすべての項目が有意に高かった。これらのことから、中途退学者の多い高校に所属する高校生の場合、登校回避願望が強い点、さらにその願望が明確な理由のないまま欠席に結びついてしまいやすい傾向が明らかとなった。

その一方で登校理由では、中学生でひとつの因子を形づくっていた『自己基準』が、高校生では『学業・生活規範』と『卒業・進路』のふたつの因子に分化していた。また、『卒業・進路』の尺度得点の平均値が他の因子の平均値より有意に大きかった。これらのことから、高校生にとって登校する最大の理由は、卒業や進路といった現実的な問題と考えられる。この点が、卒業がほぼ間違いなく保証され、かつ進路もほとんどが高校進学で占められる中学生との大きな違いなのであろう。森田（1991）は、「手段的（instrumental）な価値」から「コンサマトリー（consummatory）な価値」への転換が子どもたちにも広がっていることを指摘しているが、高校生の場合、高校に通う最大の理由が卒業・進学という「手段的（instrumental）な価値」に基づいている点は、従来と変わっていないと言えよう。しかし、中学生の95%以上が高校へ進学し、その半数以上が何らかの高等教育を受ける大衆教育社会（荻谷, 1995）では、卒業や進学がかならずしも積極的なメリットの獲得には結びつかない。本研究で取り上げた高校生の多くは、単に将来のデメリットを回避するために卒業や進学を望んでいるのかもしれない。もしそうであるならば、卒業・進学はそれほど大きな登校へのインセンティブになりえないであろうし、中学生に比した登校回避願望の高さや欠席日数の多さは当然と考えられる。

これらのことは、問題中心の対処（problem-focused coping）が、統制可能性（controllability）への評価が低いときに効果的があまり認められないという主張（Aldwin, 1994）と関連している。すなわち、学業を中心とする現在の努力が効果を持ち、将来の成果に結びつくという統制可能性への確信の乏しさは、具体的な問題に立ち向かう力を低下させ、その結果登校回避願望や欠席日数を増加させるのであろう。ただし、本研究が対象とした高校生の所属する学校は、入学が比較的容易で年間の中途退学者数が30人を越える公立高校であり、上述してきたような傾向が、他のタイプの高校に比べてより強いのかも知れない。今後、他のタイプの高校に関する同様の調査が、高校生の全体像を理解するうえで不可欠と言えよう。

欠席願望の抑制要因については、中学生とほぼ同様の結果であった。すなわち、中学生と同じ『学校魅力』がもっとも重要な欠席願望の抑制要因であり、中学生の『自己基準』に対応する『学業・生活規範』と『卒業・進路』も、中学生同様に欠席願望への抑制要因となっていた。高校生でも学校生活に楽しさや喜びを見つけないことが、欠席願望を抑制するもっとも大きな理由であった。このことは、高校生の場合も『学校魅力』、すなわち学校に積極的に彼らをつなぎ止める要因を明らかにしていく必要性を示している。例えば、学校享受感（古市, 1997）のような尺度を高校生向けに作成して、高校生の具体的な『学校魅力』を明らかにしていくことも、今後の重要な研究課題と考えられる。

中途退学者への評価意識に関しては、他の因子に比べ『消極的関心』がもっとも強く、中途退学者への関心はあまり強くない傾向が明らかとなった。多くの高校生にとって中途退学は個人の価値や判断の問題であり、そのことに積極的に関わっていく姿勢はあまり見られないと言える。このことは親密性や親和性を前提としない人間関係が高校生で進行しているという千石（1998）の指摘と関連しているのかも知れない。

欠席促進理由・登校理由・中途退学願望による中途退学者への評価意識への影響では、『積極的関心』と『批判』のような中途退学者へのはっきりした評価意識が、『学業・生活規範』や『学校魅力』という登校理由と関連していた。このことから、登校への積極的な姿勢を示す生徒ほど中途退学者への明確な評価をする傾向を持つことが明らかとなった。中途退学者への評価が明確であることが、中途退学者の増減にどのような影響を及ぼすかははっきりしないが、積極的な進路変更のような明確な理由を持たないまま中途退学していく生徒に対して、周囲が何らかの関心を抱くことは、中途退学への抑止力となる可能性がある。また、『羨望』のような評価が自らの中途退学願望の強い影響を受けている点、さらにこの中途退学願望が欠席願望と比較的高い相関があることを考

慮すると、欠席願望を低下させることは、中途退学者への『羨望』という評価を低下させることにつながるとも考えられる。中途退学者へのある程度の関心を引き出すためにも、欠席願望自体が低下するような取り組みや対応が重要と言えよう。

引用文献

Aldwin, C.M. 1994 Stress, Coping, and Development. New York: The Guilford Press.

古市裕一 1997 小・中学生における学校生活の楽しさとその規定要因 日本教育心理学会第39回総会論文集, 248.

本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究 48, 32-41.

荻谷剛彦 1995 大衆教育社会のゆくえ 中央公論社, 3-28.

文部省 2001 我が国の文教施策（平成12年度）財務省印刷局

森田洋司 1991 「不登校現象」の社会学 学文社

内閣府 2002 青少年白書（平成13年度）財務省印刷局

千石保 1998 日本の高校生 NHKブックス 日本放送協会